高体連が中止となった３年生へ　　2020.05.15 年次集会要旨

高体連が中止になったことについて、３年生の皆さんへ校長から話をします。私自身のことも交えますので、少々我慢して聞いてください。

今回は30種目の競技が中止と決定されました。開催時期が異なるラグビー・駅伝・スキー・スケート、そして甲子園大会の予選はまだ残っています。中止の理由は、競技中だけでなく移動による感染リスクが大きく、選手たちの安全確保ができないこと。休校中で練習もできておらず、負傷の恐れがあることなどがあげられました。

年間行事計画で今日５月15日は、高体連壮行会。ユニフォーム姿で決意表明をする君たちに、ここに掲げる「もう一息」という詩を贈る予定でした。武者小路実篤という作家の作品です。大会がなくなり、目標が消えた人には、もう必要のないものでしょうか。

種目によっては、国体も含めて出場資格が残されている大会はあるものの、多くの３年生は「戦わずして引退」となりました。ここまで頑張ってきて、どれだけ成長できたのか。試合がなくなるというのは、選手にとっては自分たちの力を測るものさしがなくなってしまったことを意味します。やるせない思いが募るでしょう。私は若い頃、監督として全国大会の決勝に３度進みました。３回とも負けましたが、決勝という舞台を知る人間として、中途半端な慰めの言葉を君たちに言うつもりはありません。

張本勲がこう言いました。高校生の大会が中止になり、君たちの夢が断たれたことには胸が痛む。しかし、この選択は必要なことなのだ。いつか「中止が、僕たちの命を守ってくれたんだ」と分かる日が来るだろうと。

私の父は、癌でこの世を去りました。私がこの砂川高校で日本史の授業を行っているときに息を引き取りました。いま、一人で暮らしている母親もすい臓癌になり、治療を続けています。すい臓癌とは、横綱千代の富士や楽天の星野仙一監督など、鍛えぬいた体をもっていても命を落とす病気ですが、幸いにも母には抗がん剤が効いて、発症から４年まだ元気に生きています。しかし主治医は、抗が

ん剤の投与は免疫力が低下すると考え、３月から薬の中断を決めました。

さて、君たちにとって最後の高体連は、これからの長い人生を生きていくために貴重な経験となるはずでした。しかし、開催が結果として人の命を奪うことになったら、戦いを終えた君たちの心にいつまでも深い傷を残すことになります。もちろん、若い君たちの命も失われる危険がありました。

このように考えたとき、君たちはこれからどうやって生きていくべきか。自分で考え、自分で判断し、行動できることを期待しながらも、私から３つのアドバイスを伝えます。ただその前に、どこにぶつけていいかわからない怒りや落胆を押し殺す必要はありません。その感情こそが頑張ってきた証であり、これまでやってきたことの意味につながります。もちろん、誰かを恨んでも何の解決にならないことは分かっていると思いますが。

１つ目。勝つことも負けることもなく終わった最後の大会だからこそ、ここまで部活動を続けてきた意味や価値が大切になります。仲間はどうだった？先輩との関係は？後輩は可愛かったか？先生は何を教えてくれた？いつも応援してくれていたのは誰か？ライバルは今どうしてる？そして、君は部活動を続けてきて良かったか？それらを静かに思い返すことで、スポーツがもつ勝ち負け以外の魅力を感じ、それを伝えられる人になります。

２つ目。かけがえのない高体連最後の大会よりも、人の命の大切さを選ばざるを得なかった唯一の世代として、命の尊さ、そして健康の大切さを強く訴える資格が君たちにはあります。仕事でも私生活でも、人の健康をいたわる優しさをもち、車を運転するようになったら、他の人の命の大切さを心から思える人になれるはずです。

３つ目。世の中には自分で変えられることと、変えられないことがあります。高体連の中止はもう変えられない。しかし、その先の未来は、自分で変えられます。高体連にかけてきた情熱を新しいチャレンジに変え、違う形の夢を実現させてください。やがて君たちが社会の第一線で活躍するとき、前を向こうとする力が役に立ちます。

今日はこのあと、各部活動ごとにミーティングの時間を用意しました。顧問の

先生とよく話をして、心の内を整理してください。

最後に、1980 年モスクワ五輪ボイコットによる幻の日本代表から、今の高校３年生に送ったエールを紹介します。

「下を向いていたら、虹は見つけられない。新たな目標を立てて前を向けば、君は虹を見つけられる。」